

生涯にわたって 社会のいたるところで学ぶための方法序説

大きな言葉を、小さくほどこいてみる【前編】

佐藤 克宏

提案…「地域活性化」や「協働・共創」という大きな言葉を、一度立ち止まってほどこいてみませんか？

社会教育でしてきたことは、場所が変わっても変わらなかった

こんにちは。宮城県南部に位置する角田市から、佐藤克宏です。

この4月から、私は生涯学習課を離れ、DX推進室に異動しました。

「社会教育」から「DX」へ。

こう書くと、ずいぶん違う仕事に見えるかもしれませんが。実際、日々の会議で出てくる言葉も少し変わりました。講座、学習、地域づくりといった言葉から、業務改善、オンライン申請、データ活用といった言葉に囲まれる時間が増えました。

けれども、改めて感じていることは、仕事の根っこはあまり変わっていないということです。

社会教育の現場では、かく大學や高校探究にかかる事業を立ち上げ、学習者一人ひとりの関

心や問いに寄り添い、探究のプロセスに伴走してきました。地域の中で何かを始めたい人、学び直したい人、誰かとつながりたい人の隣で、その人自身が一歩を踏み出せるように寄り添う仕事でした。

今、私が向き合っているのは、庁内の困りごとや挑戦です。

職員が感じている「この仕事、もう少し何とかならないか」という違和感。市民の方が感じている「こうなったら便利なのに」という小さな不便。まだはつきりとした言葉になっていない困りごとや願いを、一緒に見つけていくこと。

対象は変わりました。

でも、「困っている人の隣に立つ」「まだ言葉になりきっていないものを一緒に考える」「次の一歩を探索」という意味では、社会教育で大切にしてきた姿勢とつながっているように思います。

その根っこにあるのが、「伴走」という言葉だと、今は思っています。この言葉については、

後ほど改めて考えてみたいと思います。

言葉は便利だけれど…

最近、大学での授業や、市民活動・ボランティア、キャリア形成に関する場、自治体での勉強会など、ありがたいことにいくつか続けてお話しする機会をいただきました。

そこで改めて感じたのが、「言葉」の難しさです。

大学生と話していると、こちらが何気なく使った一つの言葉に対して、相手がまったく違う印象を持っていることがあります。逆に、学生が使っている言葉について、こちらが勝手に分かった気になってしまうこともあります。

たとえば「コミュニケーション力」という言葉があります。

就職活動でも、地域活動でも、行政の現場でも、非常によく使われる言葉です。

けれども、「コミュニケーション力がある人」と聞いたときに、

何を思い浮かべるでしょうか。

友達が多い人でしょうか。

話すのが上手な人でしょうか。

相手の話を丁寧に聴ける人でしょうか。

それとも、人と人、人と場、人と物事をつなぎ、何かを前に動かすことができる人でしょうか。

同じ「コミュニケーション力」という言葉でも、その中身は人によって違います。にもかかわらず、私たちはつい、その言葉だけで分かったつもりになってしまいます。

これはよく使われる「地域活性化」や「協働・共創」、「人口減少」といった言葉にも言えることです。

もちろん、大きな言葉自体が悪いわけではありません。人を集める力があります。方向性を示す力もあります。会議の場では、とても便利です。

ただ、便利な言葉ほど、その言葉を使った瞬間に、何となく分かった気になって思考が止ま

ってしまふことがあるように思っています。

「活性化」とは、具体的にどのような状態なのか

たとえば、地域の「活性化」とは、具体的にどのような状態なのでしょ

うか。商店街に人通りが増えることでしょうか。

若者が地域活動に参加することでしょうか。

空き店舗に新しいお店が入ることでしょうか。

それとも、外から見たにぎわいではなく、そこに暮らす人が「このまちで暮らしていてよかった」と感じられる状態のことでしょうか。

「活性化」という言葉は、よく使われます。

しかし、その言葉が指しているものは、実は一つではありません。(図1)

ここを分けて話を進めてしまふと、同じ言葉を使っているのに、それぞれが違うゴールを

見ているということが起こります。

これは、会議やワークショップでもよく起こることではないでしょうか。

みんなで「地域活性化が必要ですね」と言っている。

でも、ある人はイベントのにぎわいを思い浮かべ、ある人は商店街の売上を、ある人は若者の定着を、ある人は高齢者が安心して暮らせる関係づくりを思い浮かべている。

最初に必要なのは、正しい答えを一つに決めるのではなく、「今、私たちはこの言葉で何をしようとしているのか」を確かめることなのだと思います。

大きな言葉を、小さな問いにほどく

「簡単なことや当たり前のことほど深く、難しいことほどシンプルに考える」ということを大切にしたいと思うようになりました。

社会教育や地域づくりの場で

図1 「地域活性化」をほどいてみる

— 言葉の中身が見える化する —



は、大きな言葉をいきなり使うのではなく、一度「小さな問い」にほどこいてみるとよいのではないかと思います。

たとえば、次のような問いです。(図2)

これは、特別に新しいフレームワークではありません。ロジックツリー、マインドマップ、フィッシュボーン、曼荼羅チャートなど、既に多くの思考の道

具があります。それらを使うのも有効です。(図3)

ただ、道具の名前を知ること以上に、「言葉をほどこく感覚」を共有することが大切だと思います。

「地域活性化」という言葉を使ったときに、「それは誰にとっての活性化ですか」

「どんな状態になったら、活性化したと言えますか」

図2 大きな言葉を小さな問いにほどこく

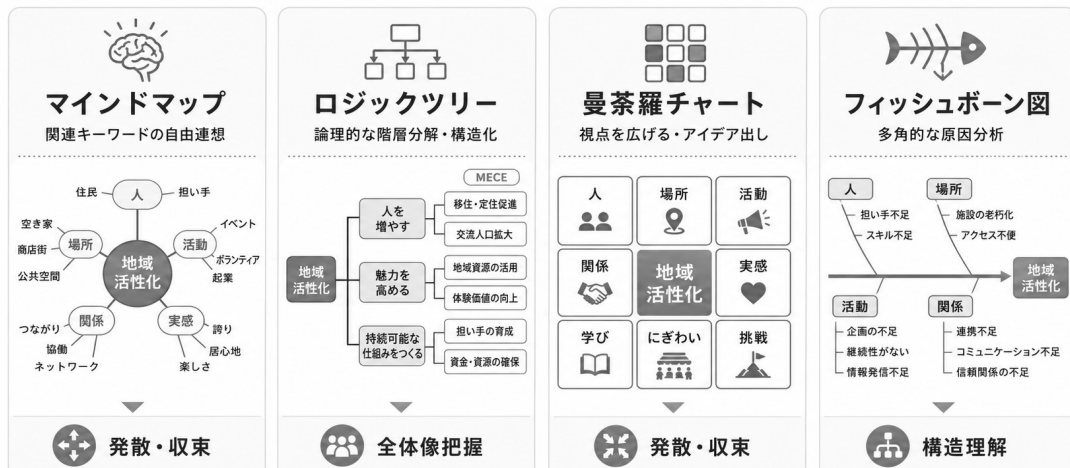
— 考えを具体化するための問いの流れ —

大きな言葉をそのまま使うのではなく、小さな問いに分けていくことで、話し合いの焦点が見えやすくなります。



図3 思考の道具の比較

— 言葉をほどこくための視点と特徴 —



「今、それを妨げているものは何ですか」

「誰と一緒に考える必要がありますか」

「まず一つやってみるなら、何から始めますか」と問い直してみる。

それだけでも、話し合いの質はだいぶ変わります。(後編に続く)

宮城県角田市総務部DX推進室DX推進係

佐藤克宏

連絡先

tasing0123@gmail.com